
離縁します！～小話集～

おこた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

離縁します！〜小話集〜

【Nコード】

N9765Y

【作者名】

おこた

【あらすじ】

この小話集は、「離縁します！」に感想を送っていただいた皆様へのお礼小話として作っていたものを、まとめてUPさせていただいております。タイピングを逃した小話や、お倉入りになっていた小話などもUPして行きますので、時系列、掲載順等は一切無視して頂けると嬉しいです。

目指すは●●使い？

目指すは●●使い？

妻「旦那さま、猛獣ですって」

夫「・・・」

妻「でも、旦那さまの場合は猛獣というよりも、ぬいぐるみですよ。髪もおひげもふさふさのふわふわで、ほっぺたに触ってもふかふかの感触ですし」

夫「・・・」

妻「肌に触れているというよりも、ぬいぐるみの生地に触れてるみたいですよ」

夫「・・・」

妻「あ、ということは、私ぬいぐるみ使いを目指せばいいんですね！」

よっしゃ、がんばるぞーっ！

と、勢いをつけてこぶしを振り上げた妻の後ろで、夫が自分のひげに手を当てて何やら考え込んでいたとか、いなかったとか。

目指すは●●使い？（後書き）

こうして、おこたの妄想劇場が始まった、と（笑）

寝ぼけた自分とその顛末（夫視点）（前書き）

初の夫視点です！

寝ぼけた自分とその顛末（夫視点）

朝。

腕をとられる感触に反射的に相手を締め上げた。

いくら寝入っていたとはいえ、接触を許すなんて、以前なら決してしなかった油断。

自分の失態を自覚するよりも先に、接触した不審者を行動不能にするべく体が勝手に動いていた。

不審者は気づかぬうちに接触してきたとは思えないほど軽く取り押さえられ、柔らかな首に腕を押し当てただけで、抵抗どころか、身動きひとつしない。

・・・軽く？ 柔らかい？

寝起きではっきりしなかった意識が一気に覚醒する。

腕を押し当てた相手は、数日前に妻になったばかりの、女性だった。

すぐに気絶してぐったりとしている体を引っ張り起こして活を入れ、意識を戻させた途端にひどく咳き込む小さな妻。

その儚げな様子に、ひどく狼狽えて、小さな背をさする。
なんてことを。

危うく自分の妻を絞め殺すところだった。
触れられるまで接近に気づかないものにも、同じ寝台で休んでいるのだから、当たり前だ。

謝罪をしようと口を開きかけると、辛そうに呼吸を繰り返す妻が、

咳で潤んだ大きな目で見上げてきた。

言葉以上に雄弁に心情を語る妻の瞳に、疑問、驚愕、思案と次々に感情と思考の片鱗がよぎり、最終的に何かを決意したのが見て取れた。

「・・・今夜から、物置部屋で寝ます」

それから責めるでも怒るでもなく、淡々と物置部屋を片付けはじめ、昼に戻って来た時にはどこから見つけて来たのか、予備の寝具まで用意されていた。

妻は本気だ。

外に出て空を見上げると、この時期独特の暗雲が立ち込め始めている。間違いなく、夜が来る前に強い雨が降るだろう。風向きは西方。

それを確認して、家の外からちよつとした細工を施した。

その夜。

物置部屋の雨漏りと隙間風がひどいから、と妻はいつも通り同じ寝台で休むことを受け入れた。

・・・妻が俺に慣れるまで、細工を戻すつもりはない。

寝ぼけた自分とその顛末（夫視点）（後書き）

夫視点、需要があるかどうか分らず、とにかく書きたかったから書きちゃった小話でした・・・。

もしも夫と妻が童話の登場人物だったなら・・・（前書き）

童話の中でキャラ達に自由に動いてもらおうと思ったのですが、
よつと予想外のことが起きました・・・

もしも夫と妻が童話の登場人物だったなら・・・

？『赤ずきんちゃん』

配役

妻…赤ずきんちゃん

夫…オオカミ

妻「この配役、断固、拒否します！ どう考えても物語通りに赤ずきんが生き残れるとは思えません！」

夫「・・・」

妻「というか、旦那さま、赤ずきんちゃんのお話を知っているんですか？」

夫「（頷く）」

妻「え、じゃあ、最後にオオカミがどうなるかも？」

夫「（頷く）」

妻「・・・なんだか、もの凄く嫌な予感がするんですが。念のために、オオカミの結末がどうなるか言ってみてくれませんか？」

夫「満腹になる」

妻「なんで満腹で終わるんですか！？ いえ、ある意味、石で満腹になっているから合ってるのかも知れないですけど」

夫「（チラリと妻を見る）・・・」

妻「（ぞくっ）き、急に悪寒が・・・。だ、駄目です、オオカミが満腹満足で昼寝しているところしか思い浮かびませんっ！ すみませーんっ、物語チェンジで！！」

夫「・・・（妻に聞こえないように舌うち）」

？『シンデレラ』

配役

妻…シンデレラ

夫…王子様

妻「……旦那さまが、王子さま？」

夫「……」

妻「いえ、あの、私のイメージだと王子さまって爽やかでほっそりしてて、子供っぽいイメージがあるので。旦那さまの場合は、軍人さんとか狩人さんとかそういう力強くて厳しそうなイメージじゃないですか」

夫「……」

妻「衣装もなんだか旦那さまには小さそうですし。それに思ったんですけど、シンデレラが王子様を振り切ってうちに帰る場面、出来ませんよね？」

妻、まだ少し距離がある夫に背を向けて走り出そうとして、捕獲される。夫、ほぼ反射。

妻「ほら、やっぱり。離れててこれなのに、ダンス中の密着状態からなんて不可能もいいところです」

夫「……？」

妻「二人が出会うのは舞踏会ですから、ダンス中に鐘が鳴ってうち帰るんですよ、って、え、なんで衣装着始めているんですか、ちょっと、ああっ！？」 やっぱり王子様の衣装は旦那様には小さいですねってダメ、ダメです、そんなに無理にひっぱったら衣装が破けちゃいますよっ！？」

夫、妻に止められて王子様役、断念。

?『ロミオとジュリエット』

※名場面のみ

配役

妻…ジュリエット

夫…ロミオ

妻「・・・う、うーん、これだったら場面が限定されていますし、大丈夫かな？」

夫「・・・」

妻「じゃあ、私はテラスに上がって、と。よし。旦那さまー、始めますよー、って、あれ？　旦那さま？」

さっきまで、こちらを見上げてスタンバイしていたはずの夫がない。

妻「え、もしや私放置されちゃいまし・・・っ!？　・・・えーと、旦那さま？　壁を登ってきちゃったら、感動のシーンが、ただの逢引シーンになっちゃうんですが・・・」

息ひとつ乱さずにテラスの柵まで壁を登ってきた夫。

・・・結局、どの物語も始められませんでした。

もしも夫と妻が童話の登場人物だったなら・・・（後書き）

物語の枠の中で好き勝手動いてもらおうと思ったのに、まさか物語自体が始まらないとは・・・。

極秘任務：夫に無茶振りし、その反応を確認せよ！（前書き）

「妻（極秘部隊所属？）から無茶振りされたら夫はどうするか？
がテーマ（？）です！」

極秘任務…夫に無茶振りし、その反応を確認せよ！

夫には内緒で所属した私の部隊から、極秘任務状が届きました。
初めての任務です！

わくわくどきどきしながらその内容を読んだ私は、思わず、任務状を床に叩きつけてしまいました。

「夫に無茶振り」って、どんだけ無茶振りですか！？

それ、私がやるんですよね？

念のため、床に叩きつけた任務状の表書きを確認しますが、間違いなく私宛になっています。私にやれといっています。

ターゲットが夫という時点で、限りなく失敗に終わる気がしないでもないのですが。

とはいえ、これは任務です。部隊に所属している以上、任務は絶対に遂行しなければなりません。

夫にとっての無茶振りって、どんなことでしょうか？

さまざまな可能性を想定し、吟味し、私はいくつかの無茶振り作戦を用意しました。

作戦決行は、夫が帰宅した、その時です！

・・・夫が帰ってきません。

すでに普段の夕食時間を過ぎてしまっているのですが、夫が帰ってくる気配が全くありません。

なんなんでしょう、この物悲しさ。

すごく楽しみにしていたお出かけの日に大雨が降ってしまったよ

うな、このやるせなさは一体どうしたらいいのでしょうか。

せっかく、無茶振りをたくさん用意して待っていたのに。

覚書に書き付けた作戦計画書には、こう書かれています。

『夫への無茶振り計画！

？夫に晩御飯を作らせる！（※胃薬用意）

？夫にギャグを言わせる！（ふとんがふっとんだー、的な？）

？夫に一発芸をさせる！（宴会のネタ練習として）

？夫に歌わせる！（※候補曲…『聖歌第24章』、『語れぬ物語』

、わらべ歌『隣の隣はだーれ？』）

？夫を爆笑させる！（わきの下が狙い目？）

・
・
・

？夫に恋愛本の一節を朗読させる！（※候補…『愛の萌芽』P3

67、5行目）』

文字を追って小さくため息をつきました。

・・・夫が帰ってこなくて良かったっ！！

なんですか、この計画。一体誰が考えたんですか、いえ私が考えたんですけども。

いくら初任務で浮かれていたとはいえ、改めて考えると、これは無いです。

？の晩御飯を作らせるのも、いろんな意味で私の命にかかわってきますし、それ以外のどれもこれも、ある意味一番ダメージを受けるのは、私に違いありません。

この作戦を考えているときは、完璧な作戦群だ！と自画自賛し

ていたはずなのですが。というか、？にいたっては、夫が見て赤面してしまうような極めつけの台詞を搜して、一冊丸々読み込んだじゃっていましたし。

ノリって怖いです。

初任務を失敗どころか実行せずに終わってしまうのは非常に後ろめたいのですが、私の人生がかかっています。うん、任務状は見なかったことにしてしましましょう！

私は任務状をしまつて、夕食を作って食べ、先に休ませてもらうことにしました。

・・・ソファの上に、覚書を出しっぱなしにしていることを、忘れたまま。

翌朝。

朝に弱いはずの夫に、とても手の込んだ朝食を用意され、『愛の萌芽』P367、5行目からの文章を一字一句正確に暗誦された私は。

・・・絶叫を上げて逃亡し、捕獲されました。

極秘任務.. 夫に無茶振りし、その反応を確認せよ! (後書き)

クマさんは、意外とハイスpekだということが判明した一日。

7 夫を駢直します。爽やかにさせましょう。（夫視点）（前書き）

7話の夫視点です。

妻もいろいろ頭の中でしゃべっていますが、夫も結構いろいろたくらんでいます（笑）

7 夫を躰直します。爽やかにさせましょう。(夫視点)

最近、妻の様子がおかしい。

急に話しかけてきたり、わがままを言いだしてみたり。何か欲しいものでもあるのかと思えば、そうでもないらしい。

何か心配事でもあるのか、時々見られていないと思ったときに考えこんでいる様子なのが気になるが、その原因は口にしようとしな

い。
そんな様子のおかしい妻が、俺の風呂あがりにハサミと櫛と剃刀を手に待っていた。

にこにこめったに見せないような可愛らしい満面の笑みで出迎える妻。その小さな手にはハサミと剃刀。

・・・なんだか、いろいろと残念だ。

妻が笑顔のままにじり寄ってくるところを見ると、どうやら、これらの道具一式は俺のために用意したものらしいことに気づいた。

とはいえ、剃刀はまずい。

小さな妻がハサミを持つとうが包丁を持つとうが全く気にならないが、剃刀はだめだ。

もし何かの拍子に俺が動いてしまったら、妻も無傷ではいられない。
い。

ハサミや包丁なら、怪我をさせることなく取り上げることまでできるが、刃を直接もつ剃刀は、どうしても怪我をさせてしまう可能性

がある。

さて、どうやって妻の意識をそらせるか。

ぐるりと室内を見回し、目についた椅子を妻の前に引っ張ってきて、当たり前のように座らせた。そのままの流れで妻から道具一式を取り上げても、妻は大きな目を不思議そうに瞬かせて、おとなしく座っている。

最近のやり取りの中で気付いたが、妻は、小動物の子供によく似ている。好奇心が強くて、臆病で。そのくせ、こちらが落ち着いて当たり前のようにふるまえば、それが当たり前なのか、と思い込む。多少の疑問は感じているようだが、拒否しない時点でこちらのもの。

無邪気な妻だ。

いつもまとめ上げている髪をほどいていくと、たっぷりとしたつややかな黒髪がうねりながら落ちてくる。

しっとりとした手触りの髪に、妻から回収した櫛を丁寧に通していけば、たったそれだけで、長い髪が滑らかに流れていく。

その感触を心地よく思いながら、ついだとばかりに妻に指圧を施してみた。

置いた俺の手が余るほど、薄い肩。

片手で指が回ってしまう、細い首。

指先だけで潰せてしまいそうな、小さな頭。

指圧が心地よいのか、うっとり目を閉じていた妻の首から力が完全に抜ける。もう寝てしまったのか。

本当に、無防備な妻だ。

小さな体を抱き上げてやりながら、胸の内に、おかしさと慈しみともに、ほんの少しの苛立たしさが沸き起こる。こんなに何の警戒も無く寝てしまうなんて、よほど俺は信用されているのか。それとも、ただ、意識されていないだけなのか。

・・・それなら、いつそのこと・・・。

不穏な思考が湧き上がりかけたとき、腕の中で眠る妻が、頭を摺り寄せてきた。

無意識に甘えるような、その素振り。
起きている時には絶対にしない、その動き。

それと同時に、苛立ちと不穏な思考が、凶暴な何かとともに自分の中の奥深くへと戻っていく。

知らず詰めていた息を吐き出すと、丁寧に妻を寝台の奥側へ運んで、寝具をかけて、小さな頭をなでてから、寝室を出た。

居間に戻り、妻から取り上げた道具一式を片付けようとして、ふと、前に妻が言っていたことを思い出す。猛獣使いがどうの、という話をしていたときのことだ。

「髪もおひげもふさふさのふわふわで、ほっぺたに触ってもふかふかの感触ですし、肌に触れているというよりも、ぬいぐるみの生地に触れてるみたいですよね」

猛獣というか、ぬいぐるみっぽい。

人間以外のものに例えられることはよくあるが、生き物ですら無いものに似ていると言われたのは初めてだった。・・・しかも、ぬいぐるみ。

髪とヒゲがそう思わせるらしく、じゃあヒゲを剃ったら妻はどういう感想を持つのだろう、と思った記憶が蘇る。

別に髪もヒゲも気がついたら伸びていただけで、思い入れもない。そろそろうつとおしくなってきたし、これからどんどん暖かくなっていくから防寒の意味でも必要がない。

少し考えてから、ハサミと剃刀を手にとった。

目を覚ました妻がどう反応するだろう？

驚くか、笑うか。

・・・朝が楽しみだ。

妻が目を覚ました気配で目が覚める。いつもなら起きてすぐに腕に触れて起こしにかかるというのに、今日はなかなか起き出そうとしない。

どうしたのだろうか？ とぼやける頭で考えたところで、いつも以上に、そっと、慎重に触れてくる小さな手。

感触を確かめるように何度か撫でられるのがくすぐったくて目を開けてみると、何かを真剣に考え込んでいる妻がいた。

その様子を眺めていると、やがて何かを決意したような顔になり、

ようやく目があった。

思考から戻ってきた妻と目が合うと、一気に顔が真っ赤になっていく。

離れていく手の温かさが惜しくて反射的に捕まえた。

細い腕。

こんなに小さくて細くて壊れやすそうなものが、当たり前のように動いている。ほんの少し力加減を間違えれば、たやすく折れてしまいそうな腕。

そんな繊細なものが、どうして俺のように無骨な男のそばにあるのか不思議で夢を見ているような気もしたが、手のひらから伝わる少し低めの熱は確かに自分以外の温度。

もっとその温度を確かめたくて、捕まえた手のひらに顔を潜り込ませて息をつく。

温かい。

ヒゲを剃った分、直接温度を感じられるような気がして気分がいい。手のひらが次第に温かさを増していく。甘くて優しい、美味스러운香り。

「だ、旦那さまっ!?!」

妻のあげた声に視線を向けると、真っ赤になった妻が困ったように眉尻を下げていた。

ああ、そうか。

「おはよう」

挨拶がまだだったな、と思い声をかければ、

「お、おはようございました！」

と、どこかやけくそ気味な返事が帰ってきた。

なんだか妙な挨拶だった気がするが、涙目になっている妻をみて、どうしても良くなった。挨拶が遅くなったから、怒っているのだろうか。腕を引っ張るような動きに、ああ、と思う。温かな手のひらから顔をあげると、妻がほっとしたように息をついた。

ちゅ。

ヒゲに邪魔されずに触れた妻の頬は滑らかで、唇にその柔らかさが直接伝わってくる。

ちゅ。

もう一度その感触を味わいたくて、すぐ反対の頬にキスを送る。真っ赤になっている妻の頬はいつも以上に熱く、つい、それよりも赤く染まる小さな唇に目が行ってしまう。

そこは、こちらよりも熱く甘いのだろうか。身を屈めようとして、妻が頬を抑えて寝具に埋もれてしまった。

少し、遅かったか。

さきほどみた鮮やかな赤を諦め切れず、そういえばまだ妻からのお返しを受けていないことに気づいた。掴んだままの細い手首を引っ張ると、寝具の隙間から、チラリ、と妻が濡れた目を向けて来る。

ぞくり、と背中に駆け上がるものを必死になだめながら当たり前のことのように、自分の頬を指で叩いて催促する。

妻の大きな瞳が驚いたように見開かれるが、ここで引いてはいけない。

あくまで、これは当然の習慣なのだという態度で頬を寄せて待てば、真っ赤になって小刻みに震えながらも、そっと妻の唇が最後の距離を埋める。

いつもと違う、直接肌に触れる、妻の唇。反対側の頬にも送られたその感触を噛み締めながら、心に誓った。

・・・これから毎晩、ヒゲを剃ろう。

7 夫を躰直します。爽やかにさせましょう。（夫視点）（後書き）

妻、狙われてる、狙われてる（笑）

これ、夫視点の連載を始めたら、そのまま転載しちゃうかも・・・。

妻、によりするの巻（前書き）

によりをテーマにしたら、こんな話が出来ました。

妻、によりするの巻

体の大きな夫用にと大きめのクッションを作ってみました。

元々夫の家にあったクッションも私にはかなり大きいのですが、夫にはちよつと小さいようでしたから。完成した新品クッションを両手で挟んでふかふかな感を堪能していると、ちやうど夫が入って来ました。

あ。いいことを思いつきました。

「旦那さま、旦那さま、ちよつとこれ持ってください！」

「・・・」

「あ、そうじゃなくて、両腕で押さえるような感じで、そう！　そうです！」

ソファに腰掛けた夫に完成したばかりのクッションの両端を腕で抱えるように、持たせてみました。

夫からちよつと離れて確認します。

・・・クマさんです。実家にいたクマさんのぬいぐるみそっくりなりアルクマさん（夫）がいますっ！！

元々よく似ているのですが、実家のクマさんは丸くてふかふかのお腹で、一方、夫は見るからに固そうな、柔らかさとは無縁の体つきです。

でも、こげ茶色のふかふかクッションを抱えた今の夫は、まさにクマさんっ！

うああっ、抱きつきたいです、そのふかふかなお腹の上でお昼寝

したいですっ。

熱心に眺めて内心で身悶えしている私が不思議だったのか、夫がこてっと首を傾げました。

ぐはっ!?

最近よく見かける仕草なのに、なんですか、この破壊力っ! 一瞬鼻血が出てくるかと思いました。

恐るべし、クッションマジック。そしてグッジョブ、私!

自分で自分を讃えていると、何を思ったのか夫がクッションを横に置いてしまいました。

ああっ!?! 私のクマさんがっ!

思いつきりがっかりしていると、夫はちょっと考えるそぶりを見せ、またクッションを抱え直しました。

クマさんです。クマさんが帰ってきました!

もしかしたらまたすぐにクッションを置かれてしまうかもしれないかもしれません。その前によく見ておかなければ、という使命感に燃えてにじりよると、その動きが夫を刺激したのか、素早くクッションから腕を伸ばした夫にあっさり捕獲されました。

何するんですか、これじゃクマさんが見れないじゃないですか! と憤りつつ体を起こそうとして、ふと、手のひらにふかふかな感触が。こげ茶色の、ふかふかクッションです。

・・・気持ちいい。

ちらり、と夫を見上げると、近くに置いていた本を手にとって読み始めるところでした。

あのー？ クッションも私も抱えられたままなのですが。

ああ、腕が長いから特に気にならないんですね。こんな大きなものの二つを全く気にしないなんて、さすが無い無い尽くしの夫です。

でも、まあ、夫が気にしないなら、もうちょっと堪能しましょうか。

クッションと夫の腕に挟まれた状態で少し身動きしてちょうどいい位置に収まると、私は大きく息をついて目を閉じました。

あったかくてふかふかで、心地よい昼寝の時間です。

結局。

大きなクッションは私の愛用品になりました。

・・・ときどき、リアルクマさんのおまけがついたり、つかなかったり。

妻、によりするの巻（後書き）

妻のによポイントは、やはりクマさんのようです（笑）

極秘任務2…夫を笑わせろ！（前書き）

さあ、また極秘部隊から任務状が届きました。どうする、妻！？

極秘任務2…夫を笑わせろ！

秘密部隊からまた極秘任務が届きました。

表書きは確かに私なのですが、見なかったことにしちゃおうかな、という誘惑にかられます。前回の夫無茶振り計画は、本当に無茶振りでした。あれは夫よりも私にダメージが・・・と、耳元で囁かれた夫の低い声を思い出しそうになって慌てて首を振ってその音を散らしました。

だ、ダメです！ あれは絶対に思い出しちゃダメです！！

熱があつまってくる顔を指令書であおぎながら、取り合えず、中身を見るだけみてることにしました。意を決して封筒の中身を開けると、たった一行。

「夫を笑わせろ！」

・・・いまさらですけど、この指令書を発行しているのは、いったい誰なんでしょうか？

どうしてこう毎回夫絡みの無茶振りしてくるんですか！？

夫の笑顔なんて、結婚してから一度しか見たことないんですよ！？しかも、なぜ笑っていたのかわかりませんし。

・・・そういえば、夫はあの時どうして笑っていたのでしょうか？会話を思い出しても、特に笑えるような内容でもなかったですし。うーん、ダメです。夫の笑いのツボがわかりません。

でも、でもですよ。もしこれが発見出来れば、いつでも夫の笑顔が見れるようになるってことですよね？　それって、未来の奥さまと円満な関係を築くのにとっても重要なポイントです。無い無い尽くし解消にも役立つこと間違いなしですよ！

俄然、やる気が出てきました。夫の笑いのポイント発見計画、発動です！！

食後のまったりタイムに夫はいつも通り晩酌を楽しんでいます。ある意味、一番寛いで油断している時間帯。しかもお酒を飲んでいますから、笑いの沸点も低いはず。お皿を片付けるふりをして、夫の背後に回ってスタンバイ完了。

いざ、作戦決行です！！

「旦那さま！覚悟！」

手っ取り早く笑わせるとなれば、くすぐるのが一番！　夫の脇に手を入れてくすぐろうとしたら、いつの間にか目の前に夫の無表情がありました。

・・・あれ？

なんで夫の顔が目の前に？

というか、どうして私は夫の膝の上に抱えられているのでしょうか？

頭に「？」をたくさん浮かべて固まっていると、夫が首を少し傾けました。

ああっ、これが髪とヒゲを整える前なら、首かしげクマさんだったのにつ。

思わず悔し涙を流しそうになったのですが、夫が少し目を細めて私を見ているのに気づいて、固まりました。

・・・三割増しで野生化したクマさんが首をかしげると、どうしてか、こう、身の危険を感じるといえるか、狙われているような気がしてしまうのですが。

き、気のせいでしょうか、気のせいですよ、気のせいだと思います。

慌てて夫の膝から降りようとして、それよりも早く靴を取られてしまいました。なんで靴を脱がせるんですか。嫌がらせですか。

こうなったら、再攻撃あるのみです！

うりゃっ、と夫の脇に手を伸ばしてコシヨコシヨコシヨコシヨつとくすぐりました。

どうだ！？と夫の様子を伺うと、目を瞬かせて不思議そうにしています。

あれ？

効かないんですか、私の必殺くすぐりの刑。

兄弟たちにこの刑を執行したときは、いつも大笑いしながら土下座の勢いで謝ってきたものなのですが。

なんだかちよつと負けたような気分になりつつも、諦めきれずに膝小僧をコシヨコシヨつとくすぐりますが、やっぱり無表情のままです。

何てことでしょう。夫は稀に存在するくすぐりが聞かない人物だ

ったんですね。

計画、失敗です。

というか、よく考えたら、笑いのツボってくすぐったい場所って意味じゃないですよ、そういうええ。

ちえー。といじけて夫の膝から降りようとして、がっしりと足首を掴まりました。

え。なんで足を掴むんですか、相変わらず全く動かせないんです。がどうやって掴んでるんでしょうか、というか離して欲しいのです。がっ！

嫌な予感に背筋に流れる汗を感じつつ、夫の表情をうかがって、私はビクッと震えて固まりました。

獲物を前にした獰猛な狩猟動物のような目をした夫。その口元には小さな笑みが。

だ、旦那さまが笑いましたっ！

二度目の快挙ですっ！

嬉しさのあまり飛び上がらなくなったのですが、同時にひどく落ち着かない気分になりました。

夫がじっと私を見ているその視線に、むずがゆいような、逃げ出したくなるような、目を逸らしたいような、けどもって見ていたいような、とても複雑な感覚に襲われます。

身動き出来ないのに、心臓だけがどんどん早く動いて、熱がでうで、焦りました。

も、もしかして、これが世に聞く色気というものですか!?

前は大好きなクマさんみたいだった笑みが、どうして今回は色気たっぷりの微笑みになっちゃったんでしょうか。やっぱりボサボサな髪とぼうぼうのヒゲという名の緩衝材がなくなってしまったからでしょうか。実に惜しいです。

そんなことをつらつらと考えていたら、夫が掴んだ足の裏をくすぐり始めました。

っ!!

反射的に起きる笑いを堪えながら悲鳴を上げて身を振って逃げようとしたのですが、相変わらず全く脱出出来そうにない安定感です。この人間安全ベルトめっ。全然安全じゃないくせに、詐欺です!

さんざんくすぐられ息も絶え絶えになった私は、半泣きになりながら土下座の勢いで降参する羽目になりました。

ある意味、夫を笑わせるという任務は成功しましたが。

・・・秘密部隊の指令は、もうこりごりです。

極秘任務2…夫を笑わせろ！（後書き）

任務に成功しても、結局夫に負けてしまう妻なのでした。
そして、夫はめっちゃ楽しんでます（笑）

夫による妻観察日記（前書き）

お出かけしましょう？の夫視点のワンシーンです。

夫による妻観察日記

花待ち／火兔／2日

妻は最近よく裁縫をしている。

掃除や料理をしている時以外は、たいてい針を手にとって、なかなかの速さでひと針ひと針丁寧に縫っていく。

一昨日までは薄い青、その前は紺色。

見るたびに違う色合いのものを縫っていたから何を作っているのか、気になってはいた。

お似合いですよ！ と誇らしげな笑顔を向けてくる妻に、今自分が着ているものが、妻が縫っていたものだを知った。

俺のために、妻が手作りした服。

薄手の服なのに、いつもよりも暖かな気がする。まるで少し体温の高い妻に包まれているような……。

そう思った途端、妻のように顔に熱が集まるのを感じて慌てて背を向けた。

出発を促しながら、そっと生地に触れる。

賢妻の勉強会は嫌いだが。

……たまには、二人で出かけるものいいかもしれない。

夫による妻観察日記（後書き）

夫は攻めるのは強くても、予想外の攻めに弱いタイプかも（笑）

初めてのお使い、初めての・・・（前書き）

※書類上夫との結婚が成立した数日後のお話です。

初めてのお使い、初めての・・・

夫の家にはじめてきたときに、なんて何にも無い台所なんだろう、と呆然とした記憶があります。

調理道具はもちろん、食材もなし。

かろうじて台所にあるのは、コップとお皿が数枚。

この人、いままで一体どうやって生きてきたんでしょうか。

一緒に来ていた保護者の奥様が、すぐに調理器具や食材など必要最低限のものを用意してくださったので、それで今まで凌いできましたが、そろそ小麦が足りなくなってきました。

お野菜などは庭である程度採れるのですが、新鮮な卵や、ミルクもほしいところ。

それに、私、この家に来てから、まだ一度も街に戻っていないんですよね。そろそろ、女性ならではのこまごまとしたものも買い足しておきたいところです。

そこで私は夫になった方にお買い物に行きたい、と切り出してみました。

「小麦が切れそうなので、お買い物に行きたいのですが」

夫が頷きました。行ってきていいんですね。良かった！

お金は、保護者の奥様から非常用と、当面用の二種類に分けていただいたものがあります。結婚祝いとしていただいたものなので、ありがたく、二人分の食費として使わせていただきますしょう。

街についてからどういう風に回るか、なにを買おうか考えていると、夫に紙とペンを渡されました。

見ると、上のほうに「小麦」と書かれています。

あ、忘備録ですね！

卵に、ミルク、お塩、お砂糖、果物、お庭では採れない野菜など、街で売っているかどうか分からないものも、とりあえず希望として書き込んでいきました。

食料に関してはこんなところでしょいか。

ある程度書き出したリストを眺めて忘れていたものが無いか確認していると、さっ、とそのリストが夫に取られてしまいました。

夫はざっとその内容を確認めると、それを自分の内ポケットの中へ。

「・・・え？ あ、旦那さま。それ、私のお買い物用に書き出したものなんです」

「・・・これを買ってくればいいのだろう？」

まだ他に何かあるのか？ といわんばかりに聞き返してくる夫に、思わず絶句してしまいました。

あ、当時の夫も無口でしたが、必要最低限のこれくらいの文章は話してくれていたんですよ？ 今なら3分の1以下の「買ってくる」で会話終了です。

今ならそんなにしゃべったことに感動ものですが、当時の私は夫の無口さに慣れるのが手一杯で、その短い会話文の中から必要な情報を取り出すのがやっと。

なので、言われた意味を理解した私は、思いました。

・・・女性ならではの必要品を書き出す前でよかった!!

「あの、私が自分で買いに行きたいんですが」

「・・・じきに茶会が開催される」

なんとなく、無駄だらーなー、と思いつつ、一応主張してみると、よくわからない回答が帰ってきました。

お茶会については、奥様から、結婚後も必ず出席するように言われていますし、確かにそろそろ結婚後初の開催時期ですけども。

つまり、それまで我慢しろ、と？

お、横暴です！ 買い物ぐらいいいじゃないですか！ 私だって、新鮮な食材を自分の目で選んだり、いろいろ街の中を見て歩きたいです！

と、とっさに脳内で激しく夫に抗議したのですが、口に出しては言いませんでした。

だって、ちょうど夫がソファにゆったりと腰掛けたかと思うと、こてっ、と首を傾けたところだったんです。

ク、クマさん降臨っ!!

その体勢はズルいです、反則ですっ！

焦げ茶色のフカフカ感といい、首の傾け具合といい、本当に実家のクマさんにそっくりすぎですよっ。

思いつき机に突っ伏してバンバン叩きたい誘惑に駆られますが、ここはぐっと我慢です。

もちろんクマさんに怒鳴ったり、抗議したり出来ませんし、そ

れよりも抱きつこうとする体と、勝手に動きそうになる手をとめるだけで精一杯です。

それに、良く考えると、小麦やミルクって結構重いんですね。そのほかの食材に、さらに割れやすい卵となると、私一人で持ち帰るのは困難を極めるに違いありません。となると、夫の申し出に甘えて、買ってきてもらったほうが安全です。

自分用の雑貨については、それこそお茶会のときでも十分間に合いますし、どうせなら一人で買い物するよりも、友人と一緒に見て回ったほうが楽しそうな気がします。

うん、そうですね。

「じゃ、お願いしますね、く……旦那さま」

というわけで、買い物はクマさん（夫）にお願いすることにしました。

その夜。

約一年分の小麦に絶対に飲み切れない量のミルク、一体何羽の鶏に産ませたんだという卵など、その他、馬車にぎっしり詰まれた食材の数々が届けられた私は。

……初めてクマさん（夫）に、こんこんと説教をしました。

初めてのお使い、初めての・・・（後書き）

夫 ↓ 「大は小を兼ねる」タイプ。

この時はまだ、二人分の食材の適正量が分かっていなかったようです（苦笑）

壁側で寝かせるそのわけは（前書き）

※ 「早寝をさせましょう」後のとある夜を、夫視点でお送りします。

壁側で寝かせるそのわけは

妻が眠そうだ。

そろそろ限界に近づいているのか、縫い物の針を何度も刺しそうになりながら、ちらちらと視線をよこしてくる。

・・・潮時だな。

手入れをしていた商売道具を片付けると、妻も嬉しそうに裁縫道具を片付け始める。その様子を横目で見ながら寝室に入り、寝具の中に入って目を閉じれば、それほど間をおかず妻が布団の中に入ってきた。

妻の視線を感じつつ、目をつむったまま一定の呼吸を続けていると、やがてかすかに聞こえてくる妻の呼吸も同じように浅く規則正しいものに変わっていく。

さらにしばらくそのまましていると、妻が動き出した。

やはり、今夜もか。

横向きになって目を開ければ、さっきまで腕に触れていた妻の体が狭い寝台の中を外側へ向かって転がっていくところだった。ぬくもりが離れていく。

すぐに端まで行き着いた妻は、絶妙なバランスで寝台から落ちはしないものの、そこで落ちそうで落ちない、ぎりぎりの綱渡りのようなバランス芸が披露されている。

初めてこれを見たときは、まさかそんな状態で本当に寝ているとは思わず、そんなに俺と寝るのが嫌なのか、と呆れるとともに少し攻撃的な気分になったりもしたが。

ただ寝相が悪いだけだとわかったときには、それはそれで微妙な気分だった。

いつものように、妻を起こさないように起き上がり、絶妙なバランスでふらふらしている肩を軽く引っ張って寝台の奥側へ転がす。

大人しく転がって行った妻は、壁まで行き着くと、しばらく壁に張り付いていたが、また転がってくる。

待ち構えていた腕の中にまで転がってきた妻をそっと抱き寄せると、しばらくもぞもぞ動いていたが、やがて大きく息を吐いて、大人しくなった。一度場所が落ち着けば、再び転がりだすことはない。

この一連の動きを完全な睡眠状態で行うのが、妻だ。

最近では、壁側で寝るのが好きだという、妙な誤解のせいで外側で寝たがるようになったから、ほぼ、毎晩この動きが行われている。

ただ、起きた時に自分が壁側になっても気にしていないようなので、妻が寝入った後で遠慮なく転がすことにした。

誤解が解ければ、妻が寝入るのを待たなくてもいいのだろうが、その誤解を解くわけにもいかないし、ちょっと押せば寝台から落ちてしまいそうな妻をそのままにしておくわけにもいかない。

結局、妻転がしは毎晩続いている。

・・・朝、寝台にいない妻の温もりの名残を求めて奥側で寝ていることは、秘密だ。

壁側で寝かせるそのわけは（後書き）

こうして、妻は毎晩ころころ転がっていると。
毎朝起きると、奥側で寝ているのはこういう訳でした（笑）

妻と夫のカード勝負（妻視点）（前書き）

もしも、妻が夫にカードゲームで勝負を挑んだら、どうなってしまうのか！？

妻と夫のカード勝負（妻視点）

「旦那さま！ 私と勝負してください！」

いつもの夕食後のひととき。未だに何に使うのかよく分からない道具の手入をしていた夫に、いきなり勝負を申し込みました。

夫はチラリ、とわたしの方を見たのですが、またすぐに手元に視線を戻してしまいます。いつものことながら、きかなかったことにする気ですね！？

「だーんーなーさまっ！ 私と勝負してくださいっ！」

さっきよりも大きな声で、はっきりきっぱりお願いすると、夫が小さく息をついてこちらに視線を戻しました。おっ、聞く気になってくれたようです。

「勝負は、これです！」

用意しておいたカードを突きつけると、夫が少し不思議そうに瞬きをしました。どうしてそんなものが家にあるんだ、と思っっていますね？ このためにわざわざ友人宅まで行って借りてきたんですよ。

友人はカードゲームやボードゲームの類が大好きですからね、たくさん持っていました。その中で一番絵柄がきれいだったものを借りてきたんですが、そういえば、友人が本当にそれでいいのか、と何度も聞いてきたのですが、どうしてだったんでしょう？

まあ、とにかく私は『リービス』と呼ばれるカードゲームを夫

に突きつけています。

「旦那さまはこのゲームをやったことがありますよね？」

こくり、と頷く夫に、私はしてやったり！ とほくそ笑みました。

「じゃ、もし私が旦那さまに勝ったら、私のお願いを聞いてくださ
いね」

宣言すると、夫がまたちょっと首を傾げました。

それからおもむろに自分を指差します。自分が勝ったときはど
うするんだ、ですね？ そんなの、決まっています。

「旦那さまは経験者、私は未経験者。これは旦那さまが勝って当然
のゲームなわけですから、旦那さまが勝ってもご褒美はなしです！」

ズルイって言わないでくださいね。

私は今、友人に詰め込んでもらったルールを思い出すだけで精
一杯の状況なんですから。しかも友人いわく、たぶん夫は強いだろ
う、と。そんな人を相手にご褒美制なんか取り入れたりしませんよ！

夫はしばらく何かを考えていたようですが、やがて、手のひらを
私に向け、伸ばした5本の指をゆらゆらと動かして見せました。反
対の手は頬に当てています。

む、むむ。

これは5回勝負という意味でしょうか。

「いいでしょう！ 受けてたちます！」

自分から勝負を申し込んだことも忘れて、意気揚々と受けてたちました。

その結果。

あつという間に、4連敗。

絵柄を揃えるだけのゲームなのですが、夫の手元には次々と良いカードが集まり、私のほうはちっとも揃いません。

どうしてですか、そんなに運が無いんですか、私。

ちよつと落ち込みそうになりましたが、負けませんよ！

まだ最後の大勝負が残ってます！

・・・惨敗しました。

もうっ！ なんなんですか、このカード！

私との相性悪すぎです！

ぶーぶー文句を言っていると、夫が手招きで呼んでいます。もしかして、もう一勝負してくれるのでしょうか？

わくわくしながら近づくと、素早い動きで夫が立ち上がり。

かぷ。

・・・か、かまれたあああつ！！！？

歯は立てていないので、いわゆる甘がみってやつですね、っていうか、いきなり何してくれちゃってるんですか、この人はっ！？
私のほっぺた、まだちゃんとありますよねっ！？

かまれた頬を押さえて、思いつきり動揺していると、満足気な夫が椅子に座りなおし、またカードを切り始めました。

真っ赤になって立ち尽くす私に、夫がまた5本指を動かし、反対の手はあごをゆっくりと撫でています。

も、もしかして。

次は、あご？

声に出して聞いたわけでもなかったのに、夫は私に大きく頷いて見せました。

それを見た私は、自分の心臓のために潔く敵前逃亡を図ろうと脱兎のごとく逃げ出したのですが。

あっさりと捕獲され。

・・・夫のカードゲームの強さを、いやというほど、思い知らされました。

妻と夫のカード勝負（妻視点）（後書き）

こうなっていました（笑）

夫と妻のカード勝負（夫視点）（前書き）

飛んで火にいる・・・？

夫と妻のカード勝負（夫視点）

「旦那さま！ 私と勝負してください！」

いつもの事ながら、突然妻が言い出した。最近はどうも夕食後の時間が狙われることが多いな、と思いながら、聞かなかったことにしようと手にしていた商売道具に視線を戻した

「だーんーさまっ！ 私と勝負してくださいっ！」

一段と気合が入った声からして、これは相手をするまで引かない気だな。仕方が無い、とりあえず話を聞いて、おかしいことだったら、別のことに意識を向けさせればいいだろう。まだ手入れが終わっていない商売道具をひとまず脇に寄せて、妻に視線を向けると、ひどく意気込んだ表情でカードを突きつけられた。

「勝負は、これです！」

妻の小さな手のひらに丁度納まる大きさのそのカードには見覚えがあった。

賭け事に良く使われる、『リービス』だ。

どうしてそんなものが家にあるんだろうか。俺の持ち物でないことだけは確かだ。

「旦那さまはこのゲームをやったことがありますよね？」

もちろんあるので頷きながらも、妻がやけにいい笑顔になったのが少し気になった。それにしても、『リービス』なんてどこで覚えてきたのか。鍛錬所の連中から何かよからぬ噂でも吹き込まれたの

か、とも思ったが。

「じゃ、もし私が旦那さまに勝ったら、私のお願いを聞いてくださいね」

・・・そうでもないらしい。

妻は意気揚々と勝負を申し込んできて、かつ願い事があるという。だが、その願い事をかなえるためには、勝たなくてはならない。つまり、勝つ気でいるということだ。

自分が勝ったときのことを考えているということは、俺が勝ったら？

「旦那さまは経験者、私は未経験者。これは旦那さまが勝って当然のゲームなわけですから、旦那さまが勝ってもご褒美はなしです！」

・・・やっぱり、鍛錬所の連中が何かいったのだろうか？

しかし、それにしては妻が勝つ気でいるようだし。

すこし考えてから、妻の反応を見るため、わざと何も言わずに頬を触りながら、反対側の指を動かしてみせた。

「いいでしょう！ 受けてたちます！」

妻は少し考えたあとで、意気揚々と受けてたってみせた。

ということは、やはり鍛錬所の連中からはなにも聞いていないらしい。

もし聞いていれば、俺に『リーバス』で勝負を挑んできたりしないだろう。

このゲームは、いわば、いかさまの腕を競うゲーム。

おそらく妻は気づいていないが、賭けの対象についても、妻はすでに了承している。

表面的なルールしか知らないらしい妻が勝つはずもなく。

4連敗までは、残念がったり悔しがったりしていたが、5連敗目には、カードを床に叩き付けそうな勢いで、憤慨していた。

いろいろ文句を言っているが、そのどれもが俺ではなく、カード自体への苦情だというのが面白い。

どちらにしても、負けは負け。

カードを置いて手招きをし、何の警戒心も無く近寄ってきた妻を腕に囲い、頬に顔を寄せて。

かぶ。

本当は少し歯を立ててやろうと思っていたのに、あまりにも柔らかく、皮膚の薄そうな感触に、なぜか慌てて甘噛みに変えた。

柔らかくて、温かい。

すこし舌に触れたすべらかな肌の感触と味に、満足感を覚える。

もう一度、味わいたい。

熱でも出したように真っ赤になって立ち尽くす妻に、もうひと勝負申し込む。

驚きで大きく目を見開いている妻が、今度はちゃんと賭けの対象が何かも気づいたのがわかった。

次は、その小さなあごを。

大きく頷いて見せると、反射的に逃げ出す妻。それをこちらもほぼ反射的に捕まえて、ゲームの続きを楽しんだ。

・・・妻は、甘い。

夫と妻のカード勝負（夫視点）（後書き）

何勝負させられたのかは、夫次第（にやり）

妻が早朝に目覚めたら（前書き）

夫視点にするか妻視点にするか悩んで、結局妻視点にしてみました。
夫がなにを考えているか、皆さんにはばれてしまいそうな気がします（笑）

妻が早朝に目覚めたら

その朝は、たまたま早くに目が覚めました。

隣では夫が眠っています。

困りました。

ひどく喉が乾いているので、水を飲みに行きたいのですが、いつもよりも早い時間ですし、夫は非常に気持ち良さそうに寝ていて、なんだか起こすのが申し訳ないような気がします。

かといって下手に起こしたら、私の命に関わることは、体験済み。

でもとっても喉が乾いています。

ということは、夫を起こさないように寝台から降りる方法をみつけないといけないということですね！

私は取り敢えず起き上がってじっくり考えてみました。

計画？

夫をまたいで降りる。

・・・・・・残念ながら、足の長さが足りません。夫は寝台の端ぎりぎりまで身体が来ているので、夫をまたいで床に足をつける前に夫を潰してしまいますね、却下です。

計画？

足元の方から降りる。

棚がなければ降りれるのですが、棚の上を伝って行くわけにもいきませんし。そういえば、この棚を移動させれば、こんな風に夜に起きたい時に便利ですよね。今度夫に相談してみましよう。

計画？

比較的高さが無い足側から飛び降りる。

これも足元の床が悪くなっていなければ可能なのですが、その部分の床は私が足を掛けただけでギシギシ音を立てるので、飛び降りたら床が抜けるかもしれません。危険です。

その後、????と計画を立ててみたのですが、どれも不可能で、結局寝ている夫をいつもの通り、起こすしかありませんでした。

その朝の朝食の時に夫に棚を動かすか、床の修理をお願いしたのですが、夫は利便性と普通に歩く分には問題ないということで、却下しました。

・・・私が起床するには、夫を起こす以外に道はないようです。

妻が早朝に目覚めたら（後書き）

もちろん夫妻の家は、全て夫による計画的設計&配置&仕掛けです
（笑）

妻と夫のとある休日（前書き）

妻と夫の、とある雨の日の日常です。

妻と夫のとある休日

いいお天気です。

今日はとっても、いいお天気なんです。

窓の外は真っ黒な雲で覆われていて、なにか細かなものを叩きつけるような小さな音がずっと続いていたとしても、今日はいいいお天気なんです！

外の地面が水浸しになっていようが、なんだかゴロゴロいっぺいようが、いいお天気だったらいいお天気なんですっ！

・・・今日のお出かけ、中止になっちゃうでしょうか。

まだ街以外の場所に行ったことがないので、どこかに連れて行って欲しいとねだったら、少し離れた場所にある湖まで連れて行ってもらえる予定だったんですが。

お弁当も、おやつも、飲み物もちゃんと用意したのに。お出掛け、なくなっちゃうんでしょうか。

いえっ、まだ分かりません！　もしかしたら雨がやむかもしれませんしっ！

晴れろっ、晴れろっ、と窓の外空に念を送っていると、頭の上にぽん、と衝撃が走りました。お、重いっ。一体なにが、と振り向くと夫が立っていました。私の頭の衝撃は夫の手のひらが発生源だったようです。

「旦那さま・・・」

はっ、まずい、外はまだ私の念が届いていません！

「そ、外はまだ支度中なので、覗いちゃ駄目です！」

私は慌てて窓を背に隠しました。いえ、窓のほうがずっと大きいので、全然隠れていないんですけども、こういうのは気持ちいですよね、気持ち。

というか、自分で言っておいてなんなんですが、外が支度中っていったいどんな状況でしょうか。なにを支度しているんでしょうか。とっさにいい誤魔化しが思いつかなかったからって、なに言ってるんですか、私っ!？

思わず夫の反応を伺うと、夫は相変わらずの無表情で見下ろしています。相変わらずの無反応っぷりで、むしろほっとしました。

夫は私がおかしな言動をしても、気にしないでくれるので、その辺は気分的にかなり助かります。

気が緩んで小さく息をついた途端、夫が私越しにカーテンを引いて、自然な動きでひよい、っと私を抱き上げました。

急な動きについて行けなくてバランスを崩し掛けたのですが、すぐに夫の腕が背中に戻ってしっかりと固定します。

うん、ものすごい安定感。

でも、急に抱き上げたら危ないですよ！

と抗議しようとしたら、ポスッ、という衝撃が走りました。夫が私ごとソファに腰掛け、もぞもぞ動いているなァ、と思っ

たら、夫私の中に、焦げ茶色のクッション。

これ、私のお気に入りの、ふかふかクッションです。

さらに何処からともなく取り出した可愛いネコのクッキーを口の中に放り込まれました。

あ、これは、店主さまの奥さまのクッキーです！

むむむ、しかも私がまだ試した事がない味です。新作でしょうか？
もぐもぐむぐむぐ味わっていると、今度は、最近お気に入りの作家の本が手渡されました。

うあつ！ これ、まだ読んでないやつですつ！

今度友人に借りに行こうと思ってたやつですよ！

きゃーきゃー言いながら、早速読もうと本を開き掛けて、はたつ、と気づきました。

夫の方を振り向くと、じっと私のようにすを見ています。

「旦那さま、ありがとうございます！」

どこかほっとしたような優しい目で小さく頷くと、夫も手元に本を引き寄せました。

お気に入りのクッションに、お気に入りのお菓子、お気に入りの本。そして側には、暖かな夫。

・・・雨の日のお休みも、お気に入りのようになりました。

妻と夫のとある休日（後書き）

こうして少しずつ、お気に入りが増えていく、夫婦の日常でした。

妻と夫の夜のお散歩（前書き）

夜のお散歩も、おつなもんです。

妻と夫の夜のお散歩

「旦那さま、お散歩に行きませんか？」

リーフェリア祭が近づくこの季節、空から月が消え、真っ暗になってしまふ分、星がとてもきれいに見える時期でもあるそうです。夕食前にチラッと見てみたのですが、木々にさえぎられてしまつて、あまり良く見えません。でも隙間から見える空は、確かにきらきらと星が瞬いました。

もっと開けた場所でゆっくり眺めたいな、と思ったので、夕食後の時間に夫を誘ってみました。

夫は晩酌していた手を止めて、不思議そうに私の方を見えています。これは、質問の意味が良くわからなかったときの雰囲気ですね。相変わらず無表情のままですが、最近、夫の雰囲気と視線から感情と思考を読み取る能力が格段に上がってきたように思います。

対夫限定の能力ではありますが。

「今夜はとても空がきれいですよ。一緒にゆっくりお散歩して、夜空を見にいきませんか？」

もう一度誘うと、夫は杯に残っていたお酒を飲み干して立ち上がりました。

やった！ これは夫が乗り気になった動きです！

夫は手早く鞆に何かを詰めると、私が靴を履き替えるのを待って、外へ出ました。

リーフェリア祭が近づいているとはいえ、やっぱりまだ夜は肌寒

いすね。

それに、星はきれいに輝いているのですが、月が無いので、真っ暗です。自分の足元どころか、少し先を歩く夫の背中さえ見失ってしまいそうな暗さに、思わずしり込みしてしまったのが失敗でした。

「あれ？ 旦那さま・・・？」

夫の背中、見失いました。

まずいです、これは非常にまずいです！

自宅前で遭難って、どんな遭難の仕方ですか！？

友人に知られたら、何年も言われるに違いありません。それだけは阻止しないと。

いやいや、まだ遭難したと決まったわけではありません！

大きな声で呼べば、夫が気づいて戻ってきてくれるかもしれない。

「旦那さ・・・っ！！」

呼びかけた途中で、暗闇からぬつ、と夫が戻ってきました。び、びっくりした、意外と近くに居たんですね。

夫は少し不思議そうに首をかしげて、ああ、と小さくつぶやきました。

「見えないのか？」

「え、見えているんですか？」

夫の貴重な自主的な質問に思わず質問で返してしまいました。

ああつ、なんてもったいないことを！　ここはちゃんと質問に答えてから聞き返したほうが会話が続いたのに！

チャンスをふいにしてしまつて嘆いていると、夫がこくん、と頷きました。

えーと、これは私の質問への返事ということですから、見えてい
る、という肯定の意味ですよね。

ああ、だから明かりの類を全然持つてこなかったんですね。

「見えないのか？」

夫が、また質問してきた！！

どんな奇跡が起きたのか、咄然としてしまいそうになりましたが、
そんな場合じゃありません、同じ失敗は二度繰り返しませんよ！

「これくらい離れると、旦那さまの顔が見えません」

どの程度見えないかを表現しようと少し後ろに下がったのですが、
気づけば、夫に捕獲されました。

・・・えーと。いや、今のは逃げようとか、びびったとかの動き
じゃないんですが、それも駄目なんですか？

ちょっと驚いて夫を見ていると、夫は暗闇の中、明らかに視線を
逸らして、私を抱えたまま、歩き出しました。

これ、私のお散歩にならないですよ！

「着いたら、下ろす」

抗議しようとした気配を感じたのか、何かを言う前に夫に決定さ

れてしまいました。

でも確かに、明かりも無く夜道を歩くのは私には無理そうですね。足元、全然見えていないですし。それに風がまだ少し冷たいので、こうしていると夫の体温でとても温かくて心地良いんですね。

私はちよつと悩んでから、力を抜いて夫に寄りかかりました。
楽をさせてもらいましょう！

夫の動きが一瞬ぎこちなくなつたような気がするのですが、すぐにもとの通りゆるぎない足取りで進んでいきます。

人一人抱えているとは思えない動きで、家から少し離れた広場のようになっている場所まで運んでもらうと、夫が地面に立たせてくれました。

「うわあっ・・・！」

夫に支えられて見上げた空では、無数の星々がその輝きを競い合っていました。

こんなにたくさんの星を一度に見たのは、初めてです！

大きいものもあれば、今にも消えてしまいそうなほど小さな瞬間もあります。空には、こんなにたくさんの星があつたんですね。

「旦那さま！　すごいですね、すごくきれいです！」

この感動を分かち合おうと夫を見上げると、夫は、まっすぐに私を見ていました。その視線があまりにも強くて、心臓が一音、飛びました。

「ああ、そうだな」

私が見えていないと思ったのか、いつもの首肯ではなく、声に出して返事をしてくれた夫の視線は、いまだ、私に注がれています。

それからもって来た鞆から敷物と、飲み物、私用のひざ掛けなどを次々と取り出して快適な夜空見学の会場を作ってくれたり。

星座や星の名前についての知識が皆無な私の子供のような質問に、簡潔に答えてくれたり。

とても快適で楽しい夜空見学は、空が白み始めるまで続き、夫と交わした会話の新記録を樹立しました。

・・・たまには、こうして夫とお出かけするのもいいものですね。

妻と夫の夜のお散歩（後書き）

昼のお散歩と夜のお散歩、皆さんはどちらが好きですか？

妻と夫のショートショート（ヴォルフ夫妻×2＋夫妻1）（前書き）

ヴォルフ夫妻に頂いた感想を読んで、妄想が暴走した結果です（いい笑顔）

妻と夫のショートショート（ヴォルフ夫妻×2＋夫妻1）

？ オーダー入ります

店員 「オーダー入ります！ 『嫁さんと旦那様のイチャラブ（！？）を店の柱の影あたりから覗き見』です！」

ヴォルフ 「おお、おお、勝手に見てけ。クマに蹴られてもしらねーぞ」

店員 「いいんすか、ヴォルフの兄貴。姉御、喜び勇んで走って行っちゃいましたけど」

ヴォルフ 「まで！ ミリイっ！！（慌てて妻を追いかける）」

店員 「・・・あーあ、また追いかけていっちゃったよ。姉御の思うツボだってわかってるんだろうに。それとも、さすがは姉御というべきなのか・・・」

？ 勝手にしました（ヴォルフ夫妻）

ヴォルフ 「お前が行ってどうする！？」

ミリイ 「覗き見するに決まってるじゃない！ あ、ヴォルフも見る？」

ヴォルフ 「見るわけあるかつ！」

ミリイ 「怒鳴んなくても聞こえてるわよっ！ あ、もしかして、耳遠くなっちゃった？」

ヴォルフ 「お前な・・・もう、勝手にしろ。俺は知らん」

ミリイ 「はい、じゃ、勝手にさせていただきますまーす」

ミリイ、ヴォルフの背中によじ登る。

頭まで登頂するとそのまま、強制的に肩車をさせて、見た目の割

りに柔らかい金髪に顔を埋める。

ヴォルフ 「・・・で、なにやってんだ、お前は？」

ミリイ 「勝手にやってるの。気にしないでいいよー」

ミリイ、ヴォルフの頭でお昼寝開始。

ヴォルフ、ミリイの寝息を聞きながら、下ごしらえ開始。

？ その頃、もう一組の夫妻はというと

妻 「だ、旦那さま、旦那さま！ 店主さまが、頭に何か乗せてますっ」

夫 「・・・ヴォルフの妻だ」

妻 「えっ、あの方が、あの焼き菓子の作者さまですか！？
・・・えーと、あの、旦那さま？ どうして店主さまは、奥さまを頭に乗せているんでしょうか？」

夫 「・・・（不思議そうに店主夫妻を見る）」

妻 「店主さまは獅子っぽいつて思っただんですけど、奥さまは、子猫みたいな方ですねえ」

夫 「・・・（微妙な沈黙）」

妻 「いいなあ、気持ちよさそう・・・って、旦那さま！？ 違います、違いますよっ！？ やってほしいってことじゃないです、旦那さまってば、今日私スカートだから絶対に出来ませんからねっ！？」

妻と夫のショートショート（ヴォルフ夫妻×2＋夫妻1）（後書き）

ミリイ||ミリディアは、ちまっこいけど、逃げまわるヴォルフさんをとっ捕まえて旦那にした、ある意味最強の狩人です。

・・・でもちまっこい（笑）

妻と夫の晩酌（妻視点）（前書き）

妻の思い付きから、おかしな方向へ進んでいったら、こうなりました。

妻と夫の晩酌（妻視点）

いつものように夕飯の支度をしている時のことです。

はたと気付いたのですが、私、これまで夫の無い無い尽くし改善のためにあれをして欲しい、これをして欲しいと要求する事はあっても、何かをして上げるといいう事をしていませんでした。

これはいけません。一方的に何かを要求するようでは、夫婦生活はうまくいかないと言いますものね。

私も夫の為に何かをしてあげましょう！

と、決意したのはいいのですが、夫のためになることってなんでしょう？

しばらく夫を観察してみたのですが、何がして欲しいか、よく分かりません。

分からないなら、聞いてみるしか無いですよ。

これで夫とのやりとりも増えますし、一石二鳥の作戦です。

というわけで、例によって例の如く、夕食後のリラックスタイムを狙います！

・・・最近、本当にワンパターンですよ、私。次は朝の二度寝タイムに仕掛けてみましょうか。

次の急襲予定を立てつつ、晩酌を始めていた夫に直球で聞いてみました。

「旦那さま、何かして欲しい事って無いですか？」

食卓に身を乗り出すようにして聞くと、夫はちよつと考えているようです。

お、この感じは、無視しようとしていませんね。ということは、何かして欲しい事が有るのでしょうか？

ワクワクしながら回答を待っていると、そのまま、コテツと首を傾げてしまいました。

あれ。何も思いつかなかったんですか？

ダメですよ、これじゃやりとりが成立しないじゃないですか！

「な、何かないですか？ あ、して欲しい事じゃなくて、させたいことでもいいですよ！」

私も夫に早寝させたり、時々ぬいぐるみのクマさんになって欲しくて焦げ茶色のクッションを押し付けたりしてますしね。

ここは夫婦らしくお互い様な関係でいきましょう！

そう思って更に身を乗り出して言ったのですが、何故か夫は飲もうとしていたお酒の入った杯を置いて額に手をあてて、がっくりうなだれてしまいました。

何だかひどく疲れているようにも見えるのですが、どうしたんでしょうか？

そんなに私にして欲しいこととか、させたいことを考えるのは負担だったとか？

いえ、夫は常に即決の人ですから、優柔不断で選べなくて困るということは無いはずですよ。

分からないなあ、と夫を眺めていると、一瞬背筋に寒気が走りま

した。

夫が額に当てていた手を離して顔を上げる直前、いきなり席を立てて離れたくなる程の何かを感じた気がするのですが、顔を上げた夫はいつも通りの無表情です。

な、何だったんでしょうか、今の。

これまで感じたことがない類の悪寒というか・・・いえ、多分風邪のひきはじめだったのかも。うん、きっとそうですね！

自分にそう言い聞かせていると、夫が置いていたお酒を飲みほして小さく息をつきました。

あんなに一気に飲んで大丈夫なのでしょうか？

そういえば。

夫がいつも飲んでいるお酒って、どんな味なのでしょう？ ほぼ毎晩同じお酒を飲んでいきますから、ここに夫の好みの秘密が隠されているのかもしれませんが！

お酒の入った瓶の口に鼻を近づけて匂いを嗅いでみようとすると、夫が持っていた入れ物を渡しました。

あ、確かにこっちの方がよく匂いが分かりますね。

うーん、何となく、アルコールの匂いがするような？ 色は綺麗な飴色。ちょっと揺らすと、アルコールと一緒に独特の香りがたちちのぼります。

味はどんなでしょう？

いつも夫が水のようにごくごく飲んでいるので、完全に油断して

ました。

口をつけてみると、夫がちよつと慌てていた様な気がします。

・・・出来れば、もうちょっと早く止めて欲しかったです。

一口ごつくと飲み込んだ瞬間、思いっきり噎せました。

何ですか、これ！

アルコールですよ、まんまアルコールですっ！！

香りとか味わいとかを楽しむ余地はありません。口から喉から焼けついたように熱いです。

それでも根性で食卓の上に杯を置いて咳き込んでいると、夫が水を汲んできてくれました。

命の水です！

洗い流す様に水を飲んで、ようやく咳が止まりました。

うう、体の中からアルコールが立ち上ってくるようです。夫はなんでこんなものを毎晩欠かさず飲んでるんでしょうか。

「旦那さま、喉が痛いです」

水差しからお代わりの用意をしてくれている夫に、誰かが話しかけてます。

・・・あれ？

「喉が痛いし、お酒くさいし、全然美味しくないですよ！」

え、ちょっと待って下さい。話してるのは私ですか？ 私っ!?

「美味しくないものを飲んだら駄目です、禁止です、美味しいものが飲みたいです!」

なにいつてるんですかぁーっ!?

内心めっちゃ焦っているのに、私はお水のコップを夫に突きつけながら、どさくさに紛れてわがままを言っています。

いえ、違うんです、これは私であって私でないというか、第二の私というか、えっ、私もしかして二重人格ですか!?

外と中が一致しなくて大混乱を起こしていると、夫はしばらく顎を触って何かを考えているようでした。

あ、この癖はまだフワフワのヒゲがあったときの名残ですね。今はつるつとしていますが、野生化する前のクマさんはよくヒゲに触っていましたものね。やっぱりフカフカ感が気持ちいいのでしょうか。もっと触っておけばよかったなァ、と内なる私が現実逃避している間に外側の私は夫にぎゃーぎゃー何か主張しています。

いや、もう勘弁して下さい、私・・・(泣)

夫は台所に入行って行って、何かを持って戻ってきました。何だか、綺麗な色をした飲み物みたいです。

ぶーぶー文句を言っている外側の私に飲み物を渡すと、どうやら外側の私も色が気に入ったらしく、歓声を上げながら一口。

あ。これおいしいで

「おいしーっ！ えらい、旦那さまえーらーいっ！ これなら飲んでよし！ 許可しましょう！」

だから、なんでそんなに偉そうなんですか、私！！

そして何となく面白がってますよね、旦那さまっ！？

内心の叫びなど知らずに、夫も果物の爽やかな甘みと酸味がきいた綺麗な飲み物に変えて、2人の酒盛りが始まりました。

・・・まあ、夫も楽しそうにしているので、良しとしましょうか。

内側の私もお酒が回ってきたのか、あとはただただ楽しいばかりでした。

翌朝、記憶が若干飛んで二日酔いで苦しむ私を、やけにご機嫌な夫に介抱してもらいながら、心に誓いました。

・・・お酒は、ほどほどに。

妻と夫の晩酌（妻視点）（後書き）

酔っ払い妻は、陽気な性格になるようです（笑）

夫と妻の晩酌（夫視点）（前書き）

夫視点のリクエストを頂いたので、のりのりで書いた小話です♪

夫と妻の晩酌（夫視点）

「旦那さま、何かして欲しい事って無いですか」

今朝から妻の様子がまたおかしいとは思っていたのだが、いつものように食後の酒を楽しんでいるときに、食卓を挟んで身を乗り出すようにして聞いてきた。

また何かたくらんでいるのだろうか。

妻のたくらみごとのほとんどが無害なものだから、別に質問に答えたところで問題無いのだが。

して欲しいこと、か。

しばらく考えてみたが、特に思いつかない。

「な、何かないですか？ あ、して欲しい事じゃなくて、させたいことでもいいですよ！」

して欲しいことが特に思いつかなかったことがわかったのか、さらに身を乗り出すようにして、させたいことを考えろ、とさらに言うってくる。

させたいこと。

酒を置いて、額に手を当ててうなだれた。

とりあえず、食卓に両肘をつけて身を乗り出してくるのを、やめさせたい。

今日は妻はウーマの世話でもしていたのか、動きやすい黒のズボンと濃紺のシャツといういでたちなのだが、そのシャツは、俺のだ。

当然、襟ぐりも大きく、ボタンの間隔も広い。

一番上のボタンを外しているだけなのだが、それだけで、かなり大きく開いてしまっていて。

濃紺のシャツと、白い肌。

させたいこともしたいことも、山ほどあるのを、この小さな妻はまだ知らない。

知らせないようにしているのは自分なのだが。

この無邪気さを、時々、引き裂いてやりたくなることも、ある。

いっそのこと……。

と、どす黒い思考に覆われそうになったとき、ふいに二人の友人の声がよぎった。

その花を惜しむなら。

次のリーフェリア祭まで、耐えろ。

妻に気づかれないように、大きく息を吐いて、額に当てていた手を外し、顔を上げる。引きつったような顔をしている妻を見て、多少は感じ取ったか、と思いながら、置いていた酒を煽って、アルコールでどろどろした感情を体内に押し戻して小さく息をついた。

あと、一月ほど。それが、ひどくもどかしい。

気を紛らわせるために飲み干した酒を注ぎ足すと、妻の興味が酒にうつったのか、瓶の口の匂いを嗅いでいる。

どこか小さな生き物を思わせる動き。小さな鼻で小さな瓶の口から匂いが嗅げるのだろうか、と不思議に思いながら、手に持って

いた杯を渡すと、素直に受け取って匂いを嗅いでいる。

純粹に好奇心いっぱい、動く妻は、見ていてほほえましい。そんなことを考えていたからか、妻が杯に口をつけたとき、止めるのが間に合わなかった。

妻が杯に口をつけ、コクリ、と嚥下したとたん、激しく噎せだした。

クコールは、酒の中でも高純度の酒気を持つ酒だ。

飲みなれない者には刺激が強すぎる。

汲んできた水を飲んでようやく咳が収まったようだが。

「旦那さま、喉が痛いんです。喉が痛いし、お酒くさいし、全然美味しくないですよ！」

どこか妙な声で妻がしゃべりだした。

「美味しくないものを飲んだら駄目です、禁止です、美味しいものが飲みたいです！」

いくら酒気が強いとはいえ、たった一口でよったのだろうか？

いつもよりも呂律が回っていない声で、妻が主張している。

主張、しているのだが。咳き込んだせいか、少し涙が浮かんでいる大きな目には、困惑と、羞恥の両方が浮かんでいて。

でも、水の入った杯を突き出しながら、おいしいものをよこせと強請る妻。

面白い。

顎に手を当てながら、妻の様子を観察すると、その大きな黒目に次々とめまぐるしく感情と意図が入れ替わる。

いつもの事ながら、言葉以上に雄弁に感情を語る目だ。

「旦那さま、聞いてますか、聞いてくれますか!? 美味しいものを飲むですよ、こんな美味しくないものを飲んだらいけないのです、わかりましたか!? わかったら、私に美味しいものをください! 美味しいものしか認めませんよ!」

目が、動揺で震えていたかと思うと、諦観が浮かんだのをみて、思わず噴出してしまいそうになった。

本当に、面白い。

このまましばらく見ていたい気もしたが、旨いものをよこせというもう一人の妻の主張もかなえてやりたい。

確か、台所に果実と蜂蜜があったはず。

以前、フィリウスに教わった女が好む甘く割った酒を持っていくと、どうやら、見た目から気に入ったらしく、妻が歓声を上げている。

「きれーですね、きれーなものも認めますよ! それ、ほしいです!」

寄こせ、寄こせとせっついてくる妻にその果実割を渡すと、

「おいしーっ! えらい、旦那さまえーらーいっ! これなら飲んでよし! 許可しましょう!」

みごと、許可が下りた。

満足してもらえたようだが、目がまだ動揺し続けていて、俺が面白がっているのにもちゃんと気づいたのか、涙目のまま、なにやら非難の目向けてくる。

ああ、本当に、面白い。

そのままクールの果実割と一緒に飲みながら、二人の妻が次第にともに酔っていくさまを楽しんだ。

やがて食卓に突っ伏して眠りこけた妻を寝台に運んでやりながら、普段は決して言わないような他愛も無い我俣の数々を、目覚めた妻が覚えているかどうか、楽しみだ。

翌朝。

妻は二日酔いで、夕べの小さな我俣の数々を、覚えていないらしい。

ぐったりしながら、懸命に夕べのことを思い出そうとする妻を眺めながら、知らず、口の端が上がった。

・・・また、晩酌に付き合ってもらおう。

夫と妻の晩酌（夫視点）（後書き）

お酒に弱い妻と、酔った妻を面白がる夫との間で、静かな戦い（飲まない、飲ませたい）が巻き起こること、必至。

そして勝敗は、推して知るべし（笑）

ミリィ&ヴォルフの日常ショートショート（前書き）

やっぱり身長差とか大好きです！（いい笑顔）

ミリイ&ヴォルフの日常ショートショート

？するの？　　しないの？　　の結末（朝の出来事）

ヴォルフ　「おい、ミリイ起きろ。朝だぞ」

ミリイ　「うー」

ヴォルフ　「おい、ミリイ」

ミリイ　「・・・おはようのちゅーは？」

ヴォルフ　「するわけあるかっ！」

ミリイ　「えー。だって夫婦なら朝にするもんでしょ？」

ヴォルフ　「・・・だれだ、そんな歪んだ知識植えつけたやつあ

ミリイ　「するの？　　しないの？」

ヴォルフ　「するわけあるかっ!!」

ミリイ　「仕方ないなあ」

ミリイ、仰向けで寝ていたヴォルフのお腹の上からもぞもぞ移動して、唇のすぐ脇に。

ちゅっ。

ヴォルフ　「なっ・・・お前あっ!？」

ミリイ　「してほしいなんて、我俣なヴォルフ。あ、物足りなかった？」

ヴォルフ　「誰が我俣だっ!？」

ヴォルフ、低血圧とは無縁の朝。

？やるか、やられるか　の駆け引き（昼の出来事）

ミリィ 「今日も大繁盛だったわね！」

ヴォルフ 「お前の焼き菓子もなかなか好評だぞ」

ミリィ 「ヴォルフの料理を食べた後って、なんでか甘いものが食べたくなるからねー」

ミリィ、ヴォルフの背中をよじ登り、何かを思いついて、にやり、と笑う。

ミリィ 「ねーヴォルフ、ご褒美あげようか？ あ、それともくれる？」

ヴォルフ 「どっちも断る」

ミリィ 「あら、不服？」

ヴォルフ 「どうせろくでもないこと考えているんだろうが。断る」

ミリィ 「えー、ヴォルフどんなこと考えてるのー、エロいー、むっつりー」

ヴォルフ 「誰がむっつりだ!？」

ミリィ 「・・・エロいは否定しないのね？ あ、オープンえろ？」

ヴォルフ 「お前、いい加減黙れ」

ミリィ 「はーい」

ミリィ、黙ったまま、ヴォルフの耳を。
はむっ。

ヴォルフ 「っ！ ミリィ!！」

ミリィ 「ごちそーさまー♪」

ヴォルフの背中から飛び降りて、素早く逃げるミリイと追いかけるヴォルフ。

店員 「厨房でじゃれないうださいっていつも言ってるのに・・・」

ため息をついた店員、一人で片付け再開。

？やっぱりここでもひと悶着（夜の出来事）

ミリイ 「ねー、ヴォルフ、そろそろ諦めない？」

ヴォルフ 「断る」

ミリイ 「いいじゃない、別に減るもんでもなし。あ、ツンデレ？」

ヴォルフ 「断る」

ミリイ 「もうっ、しょうがないなあ。じゃあ、いいわ。お休み、ヴォルフ」

ヴォルフ 「・・・ああ」

ヴォルフ、一人で自分の寝室へ。

ミリイ、一人で自分の寝室へ。

そして、時間が経過し。

ヴォルフ 「・・・・・・・・・・いつもいつも、本当にどうやって入ってきやがるんだ」

いつの間にか自分のお腹の上で寝ているミリイに、ヴォルフは小

さなため息をついて目を閉じた。

・・・そして、冒頭に戻る。

ミリィ&ヴォルフの日常ショートショート（後書き）

ミリィ&ヴォルフは、物語中一番ちっこいのに、一番強烈な性格をしていますので、副題は『猛獣とちっこい悪魔』でもいいかも、と一時期真剣に考えてました（笑）

友人と私（レイン視点、物語開始前）（前書き）

妻と友人の休日の過ごし方を、初の友人視点でお送りします！

友人と私（レイン視点 物語開始前）

私の友人はちょっと変わっていると思う。

多分本人は大真面目なのだろうけど、はたから見ていると、なにをしてくすかわからなくて、面白くて仕方ない。

小さな時から、なにかと目立つ兄弟たちに囲まれていても、何となく目が追ってしまうのは、いつもこの友人だった。

その友人の目下の悩みは、夫の「無い無い尽くし」。

割と直球勝負が好きな友人らしいネーミングセンスに、思わず笑ってしまったけれど、本人は真剣に悩んでいた。

何をしたわけでもないのに、ある日を境に挨拶をしても頷くだけ、話しかけても頷くだけになったとか。視線が合ってもすぐにそらされるとか。

そんな男は捨ててしまえ、というのが本音だけど、それは言わずに、ただ話を聞くだけに留めておいた。

最初の頃はひどく気にして落ち込んでいたけれど、次第にそれをどうやって攻略するか、作戦を練ることに夢中になっていく友人が面白かったのもある。

ひとつのことに集中すると周りが見えなくなるのも、友人の可愛らしさだ。

どういう結論に至って、どういう行動をするか。

それを楽しみにしていたというのに、数日前からまた様子が変わった。

なにがどう変ったのか、はっきりはいえないけれど、やけに思いつめているようにみえる。

「レイン、笑茸とか自白剤って手に入らないですかね？」

・・・そう思うつめているらしい。

「レイン商会は違法行為には手を貸しません。わかってると思うけど、それ、犯罪だからね？ ついでに言うと、笑茸も自白剤も毒だから。下手したら死ぬよ？」

手に入れようと思えば、手に入らないこともないんだけど、そんなことを言ったら確実に暴走しそうな友人のために、ちょっと強めの口調で言っておいた。

友人は、ちょっと考えるそぶりを見せてから、冗談です、と笑って見せたけど。

今の間は、本気で考えてたな。

呆れた視線を向ければ、気まずげに視線を逸らしてしている。

というか。

そもそも、そんなものをもし友人の夫に飲ませるために仕掛けたら、その時点で自ぶんで掘った墓穴に片足を突っ込むようなものなのに。

しかも、そうなったら間違はなく私も道連れにされる。

薬物の出所としての報復と、自分の妻に余計なことを吹き込んだ報復と、どちらが比重が大きいかな？

うんうんうなりながら、ああでもない、こうでもないと思悩んでいる友人の首筋に咲いている華を見ながら、苦笑した。

たぶん、友人は気づいてないんだろうなあ。

友人が自分で鏡を見ても微妙に見えない、けれど今の私のように、斜め隣に座れば必ず見える位置につけられた、キスマーク。

どうやら、私は夫殿に警戒されているらしい。

そう思うと、つい、笑いが漏れる。

男装する前から何度もあっているし、既婚者であることも知っているはずなのに、わざわざこんなけん制をかけてくるということとは。

・・・今度一度じっくり話をする必要がありそうだ。

友人と私（レイン視点、物語開始前）（後書き）

夫、レインに対してめっちゃ警戒しています（笑）
虫除けは、本人さえも気付かないようにするのが夫。（↑っておい）

ささやかな謀（夫視点）（前書き）

レインが家に遊びに来る前夜の夫視点を書いてみました！

ささやかな謀（夫視点）

明日は、妻の友人が家に遊びに来るらしい。

ここ最近なんとなくふさぎこみ、ぼんやりと何かを考え込んでいることが増えた妻が、今日はやけに張り切って菓子の用意をしたり、茶器を用意したり、部屋を片付けたりしている。

足音をたてながら、くるくると動き回る妻。

体が小さいこともあって、木々を駆け回るリスのようにも見える。

そんな妻の動きを眺めるのは、なかなか楽しいことだし、妻が気分転換できるのはいいのだが、その動きが全て妻の友人のためのものだと思うと。

少し、面白くない。

月に一度の集会で、いつも妻が真っ先にその姿を捜し、駆け寄っていく相手は、妻と同じ黒髪に、黒い瞳をもつ男装の女。

男装しているとはいえ、もともとの性別は女であり、一時期だけがグレインの妻であったこともあるとわかっていてもなお、二人が並ぶと似合いの恋人同士のように見えて。

・・・かなり、面白くない。

せめて男装をやめれば、普通の友人同士に見えるだろうに。

「はい、旦那さま！ 蜂蜜クッキーを焼いてみたんです。どうです

か？」

思考に沈んでいる間に妻が近づいてきて、焼きたての菓子をひと皿、渡してきた。

食べてみると促す動きに、ひとつつまんで食べてみると、蜂蜜の甘い香りが口の中に広がる。

かなり甘い、うまい。

じっ、と反応をうかがう妻に、小さくひとつ頷いて見せると、嬉しそうに笑った。

「大丈夫そうですね！ レインが好きな蜂蜜クッキー、かなり久しぶりに作ったのでちょっと心配だったんですよ」

・・・やはり、面白くない。

楽しみに明日の準備をする妻をこれ以上見ていたら、何かを仕出かしてしまいそうな気がして、早々に寝室に引き上げた。

いつもよりもかなり遅い時間になって、ようやく妻が寝室に入ってくる。

焼き菓子の甘い香りを漂わせながら、あっという間に眠りについた妻はいつも通り腕の中に転がってきた。

いつものように大きく息をついて、身動きを止めた妻をしばらく見下ろし。

そっと妻の首筋に唇を寄せる。

妻が鏡を見ても見えない、ただし、横に座れば必ず見える位置に、ひとつ。

念のため。

それから、少しだけ、服の襟元をくつろげて胸元にも。

・・・ひとつでは、とまれなかった。

ささやかな謀（夫視点）（後書き）

絶妙な位置の、ひとつだけじゃ無かったようです。

そして、妻は気付かない（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9765y/>

離縁します！～小話集～

2011年12月19日18時07分発行